

## 上田正行先生を送る

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2017-10-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 木越, 治 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2297/17435">http://hdl.handle.net/2297/17435</a>

# 上田正行先生を送る

上田正行先生は、この三月に、無事定年を迎えられ、金沢大学を去ることになった。いささか心淋しい思いはあるが、しかしそれ以上に、新しい場所での先生のいつそのご活躍を期待したいと思う。

上田正行先生の金沢大学におけるお仕事として、同僚として立場からぜひ触れておきたいのは教育面での業績である。研究に関しては、本誌にも業績一覧が掲載されており、ふだんでも論文や著書のかたちで公にされる機会が多いから目につきやすいはずである。しかし、教育は、大学教員の仕事の大きな柱でありながら、たとえは何年度に何人の学生を指導し……というようなことを記録するような習慣は大学にはない。だから、外からはよく見えないにちがいないが、しかし、先生は、一貫して、他の三人分くらいの仕事をずっとお一人で引き受けられてこられたのであり、このことは先生のとでも大切な業績としてぜひ書き留めておかねばならないと思う。

金沢大学に限ったことではないはずだが、国文科では、卒業論文にしろ修士論文にしろ提出される論文の半数以上が近現代文学であ

るのが常の姿である。また、ふだんの講義・演習でも、受講生数は古典文学や国語学を担当する他の教員の倍とまではいわないにしても50%増しくらいであることは確実であろう。そういう意味で、国文学教室の教員四人における教育分野での仕事の負担割合は明らかに上田先生の方に多くかかっていたはずだが、そのことに関するグチを先生がもらされることは皆無であった。その点、同僚として本当にありがたいことであつたと、この場を借りてあらためて御礼申し上げたいと思う。本当に感謝しております。

以下は、ややウチワ話めいてしまいが、たくさんいる学生のなかには、時には予想以上に手のかかる学生も出てくる。そういう学生に対して先生は親御さんと連絡をとり、ときには実家まで赴いて相談に乗ったりされていたようである。また、私費留学生のなかには、学費をかせぐためのアルバイトに多くの時間をとられ勉強の時間がなくなるものもあり、見かねて学費を立て替えたりされるようなこともあつたようである。あるいはまた、アパート入居の保証人になつたため家賃を払わずに帰国してしまつた学生の後始末に苦慮され

木越 治

ていることもあった。我々はそういう問題の処理が終わったあと、教室会議などで「実はこんなことがあった」という報告をうかがうだけで、すべては先生が一人で処理されていたようなのである。短気な私などにはとても及びもつかない丹念な対応をされていて頭の下がる思いをしたことは一度や二度ではないのである。

留学生30万人計画が発表されて、大学では、これからますます留学生が増えることが予想されるが、私どもが先生からうかがったのは、こういう具体的問題のあったごく少数の事例だけである。しかし、たくさん留學生をあずかり、指導し、多くの学位を取得させてきた先生には、ぜひ留學生指導のためのノウハウというようなことを、私どものために書き残していただきたいと切にお願いしておきたいと思う。

近年、大学内では、なんでもメールですませる傾向があつて、これはコミュニケーションのあり方として、本当はあまりいい傾向だとは思えないのだが、しかし、いまや、コンピュータは大学教員には必須のツールになってしまっている。幸いなことに私は年齢の割に早くから親しんできた方なのであまり苦労せずにいられるが、根っからの文系人間である上田先生はどうもこの方面には弱いらしく、いつぞや近代文学関係のCD-ROMを私の部屋に持参され、「これを買ったのだけど、どうも使い方がよくわからなくて……」と困った顔をされていたのを思い出す。メールを出しても、その返事が電話であつたり、時には直接部屋に来られたり、というようなことも多かった。その点は、たぶん留學生を指導するよりはるかに苦労

されたのではないかと推察する。

ともあれ、無事、定年を迎えられ、先生は新しい出発をされるわけである。しかし、この高齢化社会において65歳などまだまだトバ口にすぎない。新しい職場は、たぶんいまよりは雑用も少なく、先生のお好きな研究と教育に専念できるにちがいない。その点は、とてもうらやましい気もするのである。

幸いなことに、後任も有能な方が来てくださることになったので、先生も安心して去ることができにちがいない。新しい場所での活躍と今後のご活躍を期待し、これまでのお礼の気持ちにかえさせていただきます。